

巻頭言

学校法人柳城学院創立 125 周年祝辞

日本聖公会中部教区主教・学校法人柳城学院理事

西原 廉太

柳城学院創立 125 周年、誠におめでとうございます。柳城学院は、1898 年に、マーガレット・マドラ・ヤング先生が保姆養成を開始し、さらに、柳城保姆養成所を設立、幼児教育を通じて宣教する保育者の養成を目指すと同時に、各教会の幼稚園開設に尽力され、それが現在の柳城学院へとつながっている。この歴史とその意味は、現在、他に多数林立する保育者養成、幼児教育を専門とする諸学校には決して真似することもできない、柳城学院だけの最大のアドヴァンテージであると確信します。その意味でも、私は、ヤング先生のご貢献はもちろんですが、ヤング先生を支えたカナダからの宣教師たち、また、日本人同労者たちのお一人ひとりを、丁寧に覚えることは非常に大切であると考えています。

とりわけ、そのお一人である、エディス・M・トレント先生のお働きは、限りなく貴重なものです。トレント先生は、ヤング先生に先立つ一年前の 1894 年に来日され、草創期の柳城をヤング先生と共に支え、1910 年に柳城幼稚園の分園として、名古屋市西区にあった聖ヤコブ教会の階下の畳敷き大広間を利用して始まった「幅下分園」を、1930 年に主のもとに召されるまで大切にされました。私が 2017 年にカナダ・トロントにあるカナダ聖公会アーカイブスを調査した際に、今から 93 年前の 1930 年 12 月 9 日に聖ヤコブ教会で行われたトレント先生の葬送式の資料と共に、同労者であったロレッタ・ショウ先生による追悼文を発見しました。そこには、このような一文がありました。

「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ。ミス・トレントは、すべて重荷を背負う女性たちの助け手であった」

そこには、トレント先生が「幅下分園」を通して、子どもたちへの愛の眼差しはもちろん、お母さんたちや、若い保育士の女性たち、また、柳城保姆養成所で学ぶ女子学生たちへの深い愛情と共感があったことが明確に記されています。葬儀の様子を、ハミルトン主教夫人が報告されていますが、聖ヤコブ教会聖堂には、中部教区や柳城関係者のみならず、名古屋市内から一般の多くの方々詰めかけて、トレント先生との地上での別れに涙したとのことでした。

柳城学院の「建学の精神」は「愛をもって仕えよ」です。トレント先生は、この愛をもって仕えることとは、「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ」ことであると、その身をもって伝えてくださいました。私たちも、「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ」ことのできる保育者を生み、育てるといふ、柳城学院の使命-ミッション-を、これからも丁寧に担ってまいりたいと願うのです。

カナダ聖公会アーカイブスで入手しました資料に、カナダ聖公会女性補助会が発行していました機関誌『リビング・メッセージ』があります。その 1923 年 11 月号には非常に興味深い記事が掲載されています。1923 年 11 月、つまり今からちょうど 100 年前の記事です。

(名古屋の E.M. トレント先生は、大地震の直後、ノースカロライナ州ウィンザーの祈りのパートナーに次のような鬼気迫る手紙を送りました。)

私がこの最後の数行を書き記したとき、私たちは目の前にあることを夢にも思っていませんでした。私たちはなんと恐ろしい日々を過ごしてきたことでしょうか。しかし、どれほど、神さまに感謝したことか！神さまは、このひどい災難の中で私たちを守ってくださったのです。

1923 年 9 月 1 日（土）、私たちが休暇を過ごしていた御殿場で、私たちが経験したあの恐ろしい日のことを、今、静かな時間が与えられましたので、語ってみようと思います。ミス・クックと私は 2 階にいました。ちょうど昼食をとり降りてこようとしたその時、ガシャンという音と、家の真下で大爆発が起こったかのようなものすごい揺れが起こったのです。そして小さな家が軋み始め、私たちが踊り場の階段を降りようとしている間に何度も揺れました。ドアは抜け落ち、窓も落ちました。落ちたり割れたりしそうなのはすべて棚や他の場所から転げ落ちました。陶磁器はことごとく壊れてしまいました。小さな家一軒でさえ、これだけでも十分ひどいことなのですが、この恐ろしい大災害に覆われた規模を考えると、想像を絶します。

私たちは見事に冷静さを保ち、外に出ることができました！しかし、足元ではまだ大地が大きく揺れ続け、立っていることも不可能でした。私たちのためにお手伝いをしてきている、おくにさんは、外で木に抱きついていました。私たちの夕食を入れた台所用品や、金庫から取り出したもの、火鉢、食器棚は床に散乱しましたが、スープや野菜を煮た鍋が火を消すのに役立ちました。大きくて重いストーブの火鉢は地面に逆さまに置かれ、大きな余震が続き、少なくとも 4 時頃までは何も手を付けられませんでした。

しかし 4 時ごろには静かになったように見えたので、私たちは恐る恐る、慎重に、2 階に布団を取りに行きました。きっとみんな外で寝ることになろうかと備えるためでした。ベッドに荷物を 1 つ下ろしたところで、別の荷物を取りに行きました。そのときまた大きな揺れが来ました。それは前よりもひどい揺れで、私は階段を転げ落ち、ボールのように左右に跳ね回されたのです。この時ついた黒いあざはいくつも残っていますが、それ以上にはならなかったことを神さまに感謝しています。地震にあれほど神経質になる人がいるのも、今なら理解できます。

その夜、私たちは日暮れを迎えたくはありませんでした。明かりはなく、火事になるのを恐れてロウソクを 1、2 本灯しただけでした。私たちは薄明かりの中で寝床を整え、星と露の下、鳥たちと一緒に布団に入りました。

言い忘れたのですが、最初に揺れが始まり、私たちが無事に外に出たとき、「火事だ！」という声が聞こえ、大地を揺るがすような音の中、私たちはミス・ライカー先生の台所の火を消すのを手伝ったのでした。彼女も夕食を調理中だったので、石油ストーブの石油ランプはすべて点いていました。もちろん、これらは逆さまになり、テーブルに火をつけたのです。恐ろしい状況でしたが、多くの人の手と重い掛け布団と水のおかげで、火は消えたのです。本当に神さまに感謝です。

私たちの貧相な小さな夏の家が、ひどい揺れに耐えていたのは素晴らしいことです！9 月 1 日の午後、私たちは恐ろしい夢の国にいるかのようでした。まるで現実ではないようで、何もかも、す

べてが現実でした。不快で恐ろしい地震や揺れが何日も続きました。雨も降り、外で暮らすには快適ではありませんでした。その後、私は全国を回り、人々がどのように過ごしているかを見て回りました。もし時間があれば、さまざまな家族と出会い、荒廃した表情に触れたことについて、より詳しくお伝えできるのですが。我が家から数メートル離れた道路に大きな亀裂が入り、岩や巨石がごろごろと転がっており、家屋は倒壊し、他の家屋は土台から外れていました。誰もが最善を尽くそうと奮闘していたのです。

日曜日には、近所の庭で短い礼拝を持ちました。午後にもまた礼拝がありました。その合間を縫って、私たちは何とか時間をやりくりしました。何かもっと大きなことが起こっているような、不思議な感覚でしたが、横浜と東京について、当時はそれが最悪の事態であることを知る由もありませんでした。手紙も電報も届かず、ニュースも発信できなかったからです。あらゆる電線と通信手段を失っていました。

私たちが、ここ名古屋に戻ったのは9月5日の真夜中でしたが、通常の電報は受け付けられなかったので、誰も私たちを待ってはいませんでした。広瀬さんも私たちのことは何も知らず、ただ案ずるのみでしたが、私と、おくにさんが戻った時、本当に安堵してくれたのです。私たち全員が無事に再会できたことに本当に感謝した。名古屋でもこの夜は少し揺れました。

この数日間、あなたは私たちよりも先にニュースを知っていたことでしょう。私は、あなたが私たちのために、神さまに"お願い"していてくれるように感じていました。そして、私たちは見事に守られました。私たちが心配していた日本人クリスチャンのほとんどは無事でした。次々と無事の報せが飛び込んできたのです。

名古屋に戻ってからは、救援活動に忙殺されていることは、ご想像いただいていると思います。まだこれから何日もかかります。名古屋は鉄道の中心拠点であり、毎日何千人もの家を失った人々が通過するため、心も手もいっぱいです。あらゆる種類の、あらゆる立場の人々が支援しています。それらは本物の社会奉仕の働きです。名古屋駅近くに巨大なテントが張られました。組織化された委員会が活動していて、あらゆる年齢層、あらゆる信条、若者、女性たち、仏教徒、クリスチャンたちが肩を並べて、懸命に働いているのです。

赤十字の看護婦や医師、軍医、軍病院の看護婦が治療にあたり、たくさんの医療品なども並んでいます。別のテントでは、疲れて怯えている人々に癒しを与えるための備えがなされています。食べ物や衣類を配り、洗濯や休息を与え、優しい言葉をかけ、共感しようとしています。それらは、すべてを失った人々を救うものです。

このような悲しい物語を、私は今、たった一日の午前中に書いています！もっと時間さえあれば、私が出会い、話した、人ひとりの物語を、何ページにもわたって語るができるのに。ああ、すべてがとても悲しいです！

このように書いている最中にも、ポーリン・コジュナさんから葉書が届きました。彼女と彼女の家族は無事だったけれども、「すべてが焼け落ちてしまった」そうです。

(1923, 11, Living Message)

このちょうど100年前に書かれたトレント先生の書簡から、今の私たちが学ぶべきことは数多く

学校法人柳城学院創立125周年祝辞

あります。みなさんの柳城学院の建学の礎の一人であるトレント先生も大震災で大変怖い思いをされたことに、まずは思いを馳せたいと思います。

私なども関東大震災と言えば首都圏の問題であったと認識していましたが、実際には名古屋でも救援活動が行われていたことに驚きました。おそらくこの救援活動に携わった人々の中に、みなさんの先輩たちもおられたことでしょう。

「喜ぶ者たちと共に喜び、悲しむ者たちと共に悲しむ」

125周年を祝うこの時にあって、この柳城学院の「建学の精神」をあらためて確かめながら、これからも大切にしていきたいと思います。